

『子育て支援拠点を利用する子育て当事者の支援ニーズの特徴』

吉 山 怜 花 埼玉大学大学院教育学研究科
吉 川 はる奈 埼玉大学
諸 山 美 咲 元埼玉大学

キーワード：子育て・子育て支援拠点・支援ニーズ・核家族

1. 問題と目的

1-1 都市部で見られる子育ての孤立状態

日本ではかつて子育ては家族や共同体の中で行われてきた。しかし現在は、全国的に都市部への人口流入が進み、家族や共同体のつながりも以前より弱くなっていることが指摘され社会問題になっている。佐藤(2010)は、都市部を中心に核家族世帯が多くを占め、在宅親子の地域における「孤立状態」が深刻だと指摘している。自分の生まれ育った地域以外で子育てをする者の中には、子育てを家族や周りの地域の人に頼むことが難しいと困っている人もいる。特に3歳未満児を家庭で保育する割合は高く、全体の6～7割を占めており、その親たちが抱える子育ての不安や悩みを相談できる場所が大切であることが推測される。また吉川ら(2014)は、3歳未満児をもつ親は子育ての悩みや不安を抱える割合が高いことを指摘している。したがって、乳幼児が多く居住する地域の子育て支援ニーズを明確にして、それに合わせた対応をしていくことが求められている。

1-2 子ども・子育て支援新制度

このように子育ての環境や子どもを取り巻く環境が変化している中で、平成27年4月から、「子ども・子育て支援新制度」が施行された。市町村が中心となって、地域の子育て家庭の状況・子育て支援へのニーズを把握し、計画を作ることが明記された。この制度のなかで、家庭内で子育てを行う家庭への支援として「地域子育て支援拠点事業」について着目する。ここでは、子育て中の親子が気軽に集い、相互に交流や子育ての不安や悩みを相談できる場所として設置されており、それぞれの地域の状態に合わせた支援をすることで、子育て親子を支えている。地域の特徴や状態に合わせて設置することがこの事業のねらいであり大切な部分である。

1-3 核家族の子育て

子育ての不安や悩みを相談できる場所が現代ではとても大切であると先述したが、子育て中に転居をして、新たな場所を開拓していかなければならない家族もいる。統計局の調査で、未成年の転入者数は「0-4歳」が最も多くなっており、低年齢の子どもをもつ家族には転出入をすることが多い。転居では、慣れない子育てに加えて、地域環境の変化や交友関係の変化が起これ、それをストレスと感じてしまうこともあるだろう。加藤・小林(2001)は「乳幼児を持つ母親の育児不安に関する研究—転居がもたらした育児不安の事例—」において、地域性や身近に相談できる相手が激減したことが母親の強い不安になり、子どもの発達への不安をも増大させたという事例

が挙げられていた。すなわち転居者の多い地域にある子育て支援拠点では、転居者家族のニーズにも対応した支援が求められる。このようにそれぞれの地域特徴を明らかにすること、子育て支援拠点を利用している母親がどのような不安や悩みを抱えているのか、そして子育て支援拠点では、その不安や悩みをどのように受け止め、支援をしているのか、そして今後どのような支援が必要かを整理検討することが重要だ。本論では、国内の複数の自治体の子育て支援拠点の子育て支援者に聞き取り調査を行い、地域や利用者の特徴と支援者の関わりの特徴を整理し子育て当事者の意識や支援者の役割について考察していく。

2. 調査方法

2-1 対象

3つの自治体にある子育て支援センター A, B, Cを対象に、各支援センターに勤務する子育て支援員に、聞き取り調査を行った。A, B, Cはそれぞれ市の人口規模が異なるが、いずれも建物が併設型の子育て支援センターであり、建物内には他の施設が設置されている。立地は駅前と郊外とで異なっている。それぞれの子育て支援センターの特徴について、施設内の構造や配置、様子を見せてもらったあと、子育て支援員に個別に1時間程度、聞き取り調査を行った。支援拠点の選定は、市名と子育て支援で検索しトップに出てきた場所をよく利用され検索されている場と判断し対象に選んだ。

2-2 方法

調査方法は筆者が職員への聞き取り調査を行った。場所は調査者が対象の子育て支援センターを訪問し、指定する部屋で調査を行った。聞き取りの回数は1施設につき1回。要する時間は1人1時間程度であった。倫理的配慮として、調査や聞き取りで得たデータは個人が特定されないようにすることと研究のみでの利用ということで了解を得たうえで、聞き取り調査を行った。また、聞き取り資料は研究以外では使用しないことで同意を得た。

2-3 調査時期

平成27年10月中旬

2-4 調査内容

ききとり調査は次の8項目についてたずねた。1最近の子育てを取り巻く状況、2子育て支援センターの利用者の様子、3子育て支援センター利用の仕方、4利用者が子育て支援センターを利用するきっかけ、5母親の仲間形成過程、6子育て支援センターで遊んでいる子どもの様子、7相談内容の特徴、8職員として接する時に心がけていること、の8項目についてたずねた。

3. 結果と考察

3-1 各施設の概要

A, B施設は、駅前に設置されており、乳幼児をもつ転出入を経験した子育て家庭の利用が多いということだった。転入によって、新たに市民となり、地域環境にも慣れないという利用者も多く、

表1 A、B、C子育て支援施設の概要

	A	B	C
市人口	2,200,000人	1,200,000人	380,000人
出生数	19,000人	10,000人	3,600人
立地	駅前	駅前	郊外
併設施設	ショップ、レストラン、オフィス	保育所	保健センター、スポーツジム
初回利用のきっかけ	買い物、引っ越し	ブックスタートの受け取り	健診、一時託児利用
利用者の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・転入者が多い、 ・核家族が多い ・多国籍の利用者や観光者も 	<ul style="list-style-type: none"> ・転入者が多い ・核家族が多い ・孫連れの祖父母利用もいる 	<ul style="list-style-type: none"> ・祖父母と同居も多い ・相談したい人もいる ・発達不安相談
支援者の関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・傾聴することを心がける ・場づくりを大事にしている ・母たちの雰囲気づくり ・喜びを伝えあえるように心がける ・母同士をつなげる 	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶をかならずして声をかける ・母親の気持ちを否定しない ・雰囲気づくりを大事にしている ・居場所づくりを大事にしている ・外では会わない間柄の母たちである 	<ul style="list-style-type: none"> ・祖父母、夫婦の子育て観の違い ・敷居を低くして利用しやすいように ・井戸端会議の場にする ・他愛のない話をする ・その場だけでも元気になってもらいたい

*市人口はH27年4月現在数、出生数はH26年度年間出生数、いずれも概数である

勝手がわからず不安な親もいるという。2施設ともに駅前に立地していることで、常に利用者は多いが、顔見知りの利用者ではなく、むしろ外では合わない間柄も、初めて出会う間柄も多いという。核家族で困ったときに頼る場所がないということも利用者には多い悩みだということだった。

一方、祖父母と同居している世帯が多く郊外にあるC施設では、世代間の子育て観の違いでの摩擦を挙げていた。近所にそのような不満を相談することができず、C施設のようなところに相談するということがあった。C施設は、保健センターが併設されており、保健センターに来所する前後に利用する家庭や、保健センターに相談するか迷っているというような訴えをもつ利用者もいるということだった。

平日の利用者は母親が多いが、A、B施設では週末は家族や父親と子どもの利用も多いということだった。母親に見られた共通の特徴は次の点だった。核家族で頼る人がない、人との繋がりや情報を求めるなど、頼りになる場所としての利用である。家に子どもと2人きりで頼る人も場所もない母親は子育てに不安を抱えており、育児本やインターネット等の情報に固執したり他の子の成長と比較したりしがちになること。さらに夫婦間や親子間における子育て観の違いも母親にとって大きなストレスになっていることが分かった。母親は同じような悩みを抱えている他の母親との繋がりを求め、サポートを求め子育て支援センターの職員と繋がり、また情報を得るために子育て支援センターを利用したりしている。実際に母親同士声を掛け合い交流したり支援者に悩みを打ち明けたりしている母親の姿が見られた。また相談事は身近な支援センターが中心であり支援者に悩みを相談することで、悩みが緩和されていくことも分かった。職員のききとりで語られた、めざしている支援で多く出てきた居場所がある安心感や訪れやすい雰囲気があることは共通していた。子育て支援センターの職員は、母親の話をじっくりと聞いたり育児のやり方を尊重したりしていつでも温かく迎えている。さらに各子育て支援センターは平日には地域の居場所となっていることが分かった。子の成長に敏感になり不安を抱える反面子の成長を一番喜び支援者や他の母親と喜びを共有したり、元気に遊んでいる子どもの姿を見たりして安心している姿が見られた。

支援者の聞き取り調査で共通して強調されていたことは、子育て支援施設のその場の雰囲気が重要で大事にしているということである。あたたかく、ほっとできる、明るく、楽しいという雰囲気づくりを大事にしているという。その理由もすべての施設で共通しており、その場を必要としている人に何度も足を運んでもらうことで、子育て不安や子育ての悩み、その深刻化による虐待等を防ぐためだということだろう。居場所のある安心感をもってもらいたい、とのことだった。また

利用者の様子をみながら、利用者どうしをつなげる配慮をするという細やかな対応も共通していた。

このようにそれぞれの子育て支援施設での支援者の関わりには、異なる部分と共通する部分が見られた。ターミナル駅に近いA、B施設では、多国籍の利用者や観光途中で困って立ち寄る利用者がみられること、A、B施設は転出入者が多く核家族が多いが、C施設は祖父母世代との同居が目立った。保健センターと併設していることもあり、利用者が保健センターに相談できずに相談することもあり、中には深刻な相談をもちこむ利用者もあるとのことだった。子どもの発達や深刻な夫婦関係の悪化など長期相談の必要と思われる際には支援員が早急に併設の保健センター保健師につなげるとのことだった。

併設の施設によっても、親子の初回利用のきっかけが異なり、支援者の役割も異なることがうかがわれた。支援者は細やかな対応をしながら雰囲気づくりを大事にしており、子育て当事者が子育ての喜びを感じることに繋げていく場としての役割を大事にしていた。

3-2 子育て支援施設利用のきっかけ

聞き取りで得られた内容について、A、B、Cそれぞれ特有の特徴を整理するために、施設利用者の利用のきっかけ、仲間関係の作られかた、支援員が支援の際に大事にしていることについてカテゴリー化して示したのが以下の表2から表4である。A、B、C、それぞれが共通の特徴とともに、他施設とは異なる特有の特徴をもっていることが示されている。

まず施設利用のきっかけについてまとめたものが表2である。支援者の回答をカテゴリー化したところ4カテゴリー、口コミ、情報収集、遊び場、他のついで、に分類された。

例えばA施設では商業施設に併設していることから、買い物のついでに利用する人が圧倒的に多いという。買い物ついで、ということ一度きりの来館ということもあるという。またそこで利用者同士の仲間はその時限りの仲間ということも多いという。一度きりの利用者も多いが、支援者はただ見守るだけというわけではなく、子育てコンシェルジュを置き、子育てでわからないことがあれば答えるだけでなく、子育ての情報共有ができるように工夫していた。

口コミやインターネットでの書き込み等が利用のきっかけとなるのは、A、B、Cどこの施設でも共通していて、他の利用者の口コミは大きなきっかけ、行ってみようと思うきっかけになっていた。特にA、Bのように駅前で核家族の利用が多い施設だけでなく、郊外にあるC施設でも口コミ

表2 施設利用のきっかけ

利用のきっかけ	回答例
口コミ	<ul style="list-style-type: none"> ・入りやすいということが口コミで広まっており、母親だけではなく、いろんな人が来ている。(A) ・友人の口コミや、インターネットで施設が綺麗で開放的なスペースがあると書いてあり利用が広がっている。(B) ・インターネットや市で発行している情報誌や口コミ。(C)
情報収集	<ul style="list-style-type: none"> ・立地の良さから引っ越しをきっかけに来る人が多い。(A) ・4月、5月、10月に引っ越しで来る人が多く、物件を探しに来たついでに来る人もいる。(A) ・海外の人が多く、中国、イギリス、アメリカ、オーストラリアなど多国籍の人が集まる。(A) ・引っ越しを機に来る人が多く、様々な情報を求めている(B)
遊び場	<ul style="list-style-type: none"> ・小さな子どもを連れていける場所がなく、家の中だけでは物足りなくて、子どもと2人きりが辛いだろうから。(B) ・室内でも遊べる場所を求めている人が多い。ゆっくりと遊びに来て、楽しんでいる様子が伺える。(C)
他のついで	<ul style="list-style-type: none"> ・商業施設の中に支援センターがあるので、買い物で来てくれる人が多い。(A)

で利用する場所を選んでいる人が多かった。B施設では利用者が人とのつながりを求めていることもあり、職員から積極的に声掛けをし、子どもの育ちと一緒に共感し喜び合うことで居心地のよい空間を作っていた。C施設では館内が広く、幼稚園に通う年齢の子でも遊べ、グループでも利用しやすいため、幼稚園の仲間などグループで来る人もいるが、遊び場として利用する単独の親子も多い。

3-3 施設内での仲間関係の作られ方

施設内での仲間関係の作られ方について支援者の回答を分類したところ、4カテゴリーとなり、顔見知り、共通の話で仲良くなる、支援者がつなげる、サークルは難しいに分類された。具体的にみていく。

A, B施設は母親同士が顔見知り程度の仲間関係を求めているという。核家族が多く、顔見知りになることが心強いという。子どものことで共通の話をして、仲良くなっていくこともある。支援者がつなげる場合には、同じ区に住む人をできるだけ、つなげていく工夫をしているという。先のことを考えてという対応だというが、利用者側は生活のペースがあくまで自分の子どもなので、施設外で、他の親子と約束して会うことまでは期待していない。

母親同士で月齢を聞きあって、情報交換している場合もあるが、一人で不安そうな親子には、支援者が声をかけていくという。

表3 施設内での仲間関係の作られ方

仲間関係づくり	回答例
顔見知り	<ul style="list-style-type: none"> ・地域に住む母親同士顔見知りが増えていき、お互いの子どもの成長の話などをして、ゆったりとした温かい空間になっている。(A) ・来館すれば顔見知りになり、少しずつ話していくことで輪が広がっていく。(B) ・一人で来る母親もいれば、幼稚園の仲間から来る人など様々である(C)。
共通の話で仲良くなる	<ul style="list-style-type: none"> ・子どものことで共通の話が出来るので仲良くなっていく。(B) ・子どもの年齢が3歳までと制限があり、同じような月齢の子をもつ母親がすぐ見つかる。(B)
支援者がつなげる	<ul style="list-style-type: none"> ・16の区があるので、近所のスーパーや医者などの情報交換ができるため、同じ区に住む人同士をつなげていく。(A) ・同じ月齢の子がいると交流が持てるように支援するが、母親同士で月齢を聞いて積極的に関わっている(C)。 ・一人で来た不安そうな母親には声をかけるが、積極的な母親もいる(C)。
サークルは難しい	<ul style="list-style-type: none"> ・顔見知りになり話をする中で仲良くなっていくが、サークルまでは発展しておらず、今は関係ができてきたところである。(A) ・生活のペースが子ども中心であり、施設外で会うことまでは発展していない様子である。(B) ・施設では一緒に遊ぶ様子が見られるが、住んでいる地域の違いもありサークルに発展していくことは難しい(C)。

B施設は母親同士が知り合うきっかけを求めて来館することが多いことから、職員が積極的に声をかけていて、かつ、共通の話から母親の仲間関係が作られていくことが共通認識されている。ただし母親同士は情報交換して知り合うきっかけになるが、子どもを中心にしたサークル活動にまでは発展せず、居場所としてそれぞれの親子がそれぞれのペースで利用している。

C施設は、保健センターが併設されていて保健センターへの来所前後に立ち寄りすることが多いとのことで、保健センターに相談に通う際の不安をもつ利用者や、相談には通っていないが小さな不安を持っていて、C施設の支援員に悩みを打ち明けてくる利用者もいて、併設されている場所によっても利用者の利用の仕方、仲間関係の作られ方は異なるようだ。

3-4 子育て支援施設として大事にしていること

表4は、施設利用者への支援で支援者が大事にしていることについての回答をカテゴリー分類したものである。4カテゴリーに分類され、それぞれ、学びあうこと、雰囲気・安心感、居心地、専門家としての対応となった。同じくらいの月齢の子をもつ親同士が、互いに子どもの成長を共感し、喜び、学びあいながら親自身も成長していくことを大事にしていた。親同士で気づく、助け合う、育ちあうということを大事にしているということだ。いずれの施設でも支援員が強調していたのは、雰囲気や安心感を大事にしているということだった。ホッとできる場所、毎日来たいと思う場所、安心して一步を踏み出せるようにすること、など初めて来る人にも敷居を低くするように気を配っているという。

さらに、居心地という言葉もいずれの支援員からもきかれた。利用者の様子をよくみて、その時々に合わせて判断して支援が一方的、自己満足にならないように気を付けているなど、あくまで、利用者のペースをよくみて、それに合わせて対応していることがわかる。

さらに専門家としての対応も説明していた。ただ、話しをきく、大丈夫とただ伝えるわけではなく、発達の悩みを抱えている母親には内容によっては、保健センター等につなげていく、つまりより適切な場所につなげていくよう、サポートしていくということだった。

表4 施設利用者への支援で大事にしていること

大事にすること	回答例
学び合う	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもがハイハイできないことに悩んでいれば、ハイハイができるようになった子をもつ母親に了承を得てつないでいくことがある。(A) ・母親同士で情報の共有ができるように支援をしている。(A) ・同じ月齢の子をもつ母親同士をつなげていく。(A) ・母親同士で話してみると、悩んでいたのは自分だけではないという安心感を得ることができる。(A) ・学び合うことを大切にしている。(A) ・母親たちは悩みが消えたら見違えるほど笑顔になるため、子どもの成長を共感し喜ぶことを大切にしている。(B)
雰囲気・安心感	<ul style="list-style-type: none"> ・傾聴することを心掛けて、一緒になって考えることや同じ立場の仲間であることを大切にしている。(A) ・長年の経験を活かし、上からの立場でサービスをしてあげるのではなく、「同じ立場で育ち合う、喜びを伝え合う」ことを大切にしている。(A) ・スタッフだけではなく、一緒にいる母親の雰囲気も大切にしている。(A) ・地域の人みんな子育てをすることや、ウェルカムな雰囲気づくりを大切にしている。(A) ・母親達にとって話せる場所であったり、ホッとできる場所があることは大きいです。(A) ・母親が安心できるような雰囲気・居場所づくりを心掛け、声掛けをしている。(B) ・毎日来てくれるような場所。リピーターは多い。(B) ・話の一つでもヒントになって、その場だけでも元気になってくれたらよい(C)。 ・話を聞いてもらえたという安心感をもち帰ってもらえたらよい(C)。 ・たわいもない話をしていく中でみんな同じなんだよってことを伝えて、安心して一步踏み出せるようにする(C)。 ・敷居を低く、誰でも簡単に相談できるということや、初めてくる人には積極的に声をかけていくことにも気を配っている(C)。
居心地	<ul style="list-style-type: none"> ・母親のペースに合わせている。(A) ・母親の様子をよく見て、その時々に合わせて判断するようにして、支援が自己満足にならないように気を付けている。(A) ・場が盛り上がってきたら、職員は一步下がって見守るようにしている。(A) ・曜日によって利用者との接し方を変えている。土日は家族で利用する人が多く、スタッフは引いて見ている。(A) ・平日は相談が多く、スタッフも一緒になって輪の中に入ることが多い。(A) ・母親の様子を見極めて声掛けをし、それが自己満足にならないように気を付けている。(B) ・相談を受けた時はじっくり話を聞いて、母親のやり方を否定しないようにして、母親のやり方に+αするような声掛けをする。(B)
専門家としての対応	<ul style="list-style-type: none"> ・悩みを覚えておいて、「どうなったの?」と次回その母親が来た時に声をかけるようにしている。(C) ・相談を受けた時はじっくり話を聞いて、母親のやり方を否定しないようにする。(C) ・発達で悩みを抱えている母親には勇気づけ、深刻な子は早期に保健センターにつなげる。(C)

3-5 子育て支援職員から見た現代の子育て意識の特徴

現代では核家族世帯が多く親子の地域における孤立が社会問題となっている。聞き取り調査では、核家族化の進行や、家の中で子と2人きりで過ごす姿、核家族化によるサポートのニーズ、悩みを打ち明ける場が無い、と親子が孤立している様子が伺えた。また、祖父母と同居し核家族ではなくとも、世代間の考え方の違いなど、悩みはつきないこともうかがわれた。このよう頼れる人やもの・場所が身近にあること、また小さな不満や不安を吐き出せる敷居の高くない居心地よく安心できる場所あることが求められていた。育児本、育児雑誌は変わらず利用されているが、ネットワーク情報などを探し、他の子どもの成長が現在子育てをしている親の育児の指針になっている。そのためネット情報に固執する、他の子との違いに不安を感じることも多く、それがまた不安の源になる。自分の子どもの成長が他の同じ月齢の子どもの成長とギャップがあると、必要以上に不安に感じてしまう。さらに情報化社会となり情報が氾濫し正しい情報を見極めることが難しいということに加え、身近にサポートが不足しているので頼れるものは情報だけで、情報の氾濫への不安と、頼れない不安というように調べれば調べるほど情報と我が子の成長との差に不安を感じ困惑してしまうのだと推測できる。また子の成長や母乳に悩む、子の発達に悩みを抱える、入園や子の成長、発達等に悩むという子どもの成長や発達に関わる悩み、初めての育児への戸惑いもある。さらに子の成長や子育て観の違いについて悩む、子育てへの不安感、子育て観の違いに悩む、親子間の育児方針の違いに悩むこともある。子育て観の違いの難しさというように夫婦間・親子間の子育て観の違いについての不満は、たとえ祖父母からサポートを受けられたとしても昔と今の子育ての仕方のギャップに悩み息苦しさを感ずる結果となってしまう。また核家族世帯の場合母親にとって一番身近な協力者である夫との子育て方針のズレもストレスを感じる原因となる。このように母親は周囲からサポートがあればよいというのではなく、育児に関して肯定され支えられていると感じることが大切である。周囲のサポートには、親を尊重する姿勢が不可欠であるとのだろう。

雰囲気や安心感を大事に、という支援員の言葉には、相手を尊重し、受け入れ不安を和らげることが出来る場所であるように出来る子育て支援拠点でありたいという姿勢が表れている。子育て支援拠点は、口コミから利用されることが多く、《土日市外から利用》、《土日や天気の悪い日に利用》、《室内の遊び場を求めて》などよく利用されており室内で小さな子どもを安心して連れて行ける限られた場所である。そのような子育て支援拠点では《子育てを肯定してほしい》、《話を聞いてほしい》という母親の切羽詰まった心境を和らげてくれる環境が整っており、職員が利用者支援の仕方として語った「訪れやすい雰囲気・居場所がある安心感を得られる」ことが母親にとって有効に働いていると推測される。子育て支援拠点では育児を肯定した声掛けはもちろん、継続した声掛け、共感し喜び合う、平等に声を掛ける、話を傾聴するということから安心感を得られ、居心地が良い場所となるのだろう。

また育児という共通の話をして仲良くなること、親同士声を掛けあうことで仲を深めること、さらに支援者の働きかけを受けて仲間が作られるなどきっかけになるようにと声をかけているようだ。

最初は、「情報を求めて」いること、顔見知り程度の人との繋がりを求めている。子育て支援拠点はその地域に住む親同士繋がる事が出来る場所であり地域の人間関係を形成するきっかけになるという重要な機能を担っている場所であると考えられる。もちろん「幼稚園等で仲間が作られる」、「公民館の子育てイベントでも仲間が作られる」、「子育てサークルの活動で仲間が作られる」

というように子育てを通じて地域の中で他に仲間関係が作られるとしても仲間と一緒に子どもの話を共有することで、支援拠点を頼れる場所、安心できる場所にできれば、子育てと向き合う支えになると推測できる。

一方で、仲間関係を発展させることまでは望まない、サークル活動への発展は難しい、また転居があるかもしれないから継続した関係までは望まない、などさまざまな考え方もあり対応は難しい。

子どもの成長を感じ安心することで子どもに対して愛情を持ち子どもへの愛情が子育てにおいて喜びを感じる要因となり、支援者や他の仲間と子どもの成長を喜び合うことで親が大変な育児と向き合う原動力となることが推測される。また子どもへ愛情を示すためには時間に追われ毎日忙しい母親という親としての役割から少し離れて、個としての自分を取り戻すことが必要であろう。このように喜びを感じる事が出来る面がありそれが母親達の原動力となるので育児を続けることが出来るのだと推測できる。

初めは手探りだった子育てが少しずつ子どもとの接し方を学んでいき、周囲の者に肯定されることで自信がつくことで、親役割を肯定的に受け入れ自らの子育てを肯定することとともに、子どもの存在を肯定することにつながると推測される。橋本ら（2007）は子育てによって親自身が得る成長感は育児の肯定へとつながり、子どもの発達にもより良い影響を及ぼすと述べている。したがって母親として成長感を得ることは重要な意味を持つと推測でき、紆余曲折しながらも母親が成長感を得る経験を積み重ねることで自信を獲得し母としての親役割を肯定的に受け入れ自身の子育てを肯定することの中で子どもという存在を肯定し子どもを愛し育てていくことに繋がると考える。

3-6 子育て支援センターにおける地域の居場所を創出する役割

「訪れやすい雰囲気、居場所があるという安心感を得られる」というようなくつろげる空間があることが親にとっても頼りになる支えをえた安心感の要因に繋がっていると考える。このような居心地の良さから何度も支援拠点を訪れる利用者もいる。家の近くにあり継続して通いやすいという利便性から徐々に地域に住む母親同士顔見知りが増えていくことができれば、望ましい。母親は情報を求めているので、適切な情報がほしい。一方、知り合いがほしい親には子育て支援拠点はその地域に住む母親同士繋がることが出来る場所であり地域の人間関係を形成していくという重要な機能を担っている場所であると推測できる。民俗学で捉える子育てを振り返ってみると1人の子どもを育てるために多くの大人がその子どもを見守り、儀礼を通じて社会的にその子どもの成長を承認してきた。現代では子どもを見守る大人が実親だけになってしまう傾向にあるが、昔の村社会の機能を子育て支援センターに置き換えることが出来ると思う。子育て支援拠点という社会の中で支援者や他の親達と子どもの成長を確認し喜び合うことが行われており、親は子の成長を「共感してもらえる喜びがある」というように充足感を得ている。このように現代でも、様々な大人の目の中で子どもの成長を見守っていく仕組み作りが重要であると思う。

3-7 育てる者が精神的なゆとりを持つことの重要性

親が子どもにとって良い親になろうと試行錯誤を繰り返す中で停滞期から抜け出せない時や子どもを思い通りにと願う子育てに行き詰まりイライラし困難を感じることはしばしば指摘される。そのような時は親役割から少し離れて精神的ゆとりを持つことが重要といわれる。本調査で子育

て支援拠点では、安心感や場の雰囲気が共通して大切にされていたが、安心感が精神的ゆとりをうみ、子をかawaiiと思えている。大変なことが多い子育てを煮詰まらずに楽しむためには精神的なゆとりが持てる時間を設定する必要がある、精神的なゆとりがあると安定した気持ちになり笑顔でいられるため子とより良い時間を過ごすことが出来ると推測される。また育児と仕事の両立で大変さを感じるというマイナスの面がありながらも、気持ちの切り替えが出来る、子とより良い関わりが出来る、自分の時間が確保できるというようにポジティブな意識を持っていることは個としての自分が充実しているからであると推測できる。母としての役割と個としての自分の両面が充実することが重要であり、親役割から少し離れてリフレッシュをすることで子どもに対して気持ちをコントロールできるようになり子どもと良好な親子関係を築いていけると考える。

ところで「オープンダイアログ（齋藤）」、は開かれた対話と訳され、フィンランド北部・西ラップランド地方にある精神科病院で1980年代前半から行われ、主に統合失調症の急性期の患者を対象にした精神療法である。公的医療制度の対象にもなっており治療では、患者と主治医だけでなく、家族や友人・知人、看護師らを交えてミーティングを開き、対等に意見を述べ合う。統合失調症の症状である妄想や幻覚、意欲の低下などの体験を語ることもタブーにしない。対話することを大切に、支えられることは大きい。居場所になることをめざすという共通した支援者の語りには、場を共有し、語りあいながら親自身利用者自身が開かれ、成長していくという子育ての成長過程への示唆を与えてくれるのではないか。

引用文献

- 佐藤純子（2010）「保育・介護労働の現状と課題 その4：保育所における地域子育て支援の実態調査を通じて」『淑徳短期大学研究紀要』49, pp. 99-110.
- 加藤恵子, 小林真（2001）「乳幼児を持つ母親の育児不安に関する研究：転居がもたらした母親の育児不安の事例」『日本教育心理学会総会発表論文集』43, pp. 429
- 小橋明子, 入江明美（2011）「子育ての動向に関する研究 育児不安・虐待等の増加に対する子育て支援について」『札幌大谷大学札幌大谷大学短期大学部紀要』41, 65-74
- 清水嘉子, 関水しのぶ, 遠藤俊子, 落合富美江（2007）「母親の育児幸福感—「尺度の開発と妥当性の検討」—」『日本看護科学会誌』271(2), 15-24.
- 関水しのぶ, 清水嘉子（2009）「育児中の母親の幸福感—育児幸福感尺度（Childcare Happiness Scale）短縮版の作成」『日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集』（18）号, P.110-111.
- 齋藤環（2015）「オープンダイアログとは何か」（著+訳）『医学書院』
- 諸山美咲（2016）「母親が子育てにおいて喜びを感じる要因についての検討」『埼玉大学教育学部卒業論文』
- 吉山怜花（2017）「転居者が多い地域特有の子育て支援ニーズの特徴」『埼玉大学教育学部卒業論文』

(2018年3月30日提出)

(2018年4月5日受理)

Characteristics of the support needs of the child-raising person's own that use child-rearing support center

YOSHIYAMA, Reika

Faculty of Education, Saitama University

YOSHIKAWA, Haruna

Faculty of Education, Saitama University

MOROYAMA, Misaki

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

Recently, there is nuclear family, mainly in urban areas, and the “isolation” in the community of parents raising children at home is pointed out. One factors of problem is moving. Moving causes by changes in the local environment and changes in friendship, and it also lead to various kinds of life anxiety and parenting. In this paper, the characteristics of support in the child-rearing support facilities in the area where there are many moving people are examined, and what similarities and differences are clarified. It was fond out that the users of childcare supports in the area which have many moving people try to obtain knowledges, information and companies for bringing up their children, and at the same time, the staffs offers supports satisfying the needs of users.

Keywords: child-rearing, child-rearing support center, support needs, nuclear family